

実践報告

## 教員による模擬患者を取り入れた看護過程演習

藤井加那子

兵庫医療大学看護学部

Report on the Nursing Process Practice Using Simulated Patients by the Teacher in the Child Nursing

Kanako FUJII

School of Nursing, Hyogo University of Health Sciences

### 抄 録

看護学部第3学年の「小児看護援助論Ⅱ」における看護過程演習で、教員を模擬患者とする演習を実践し、平成30年度兵庫医療大学全学FD/SDワークショップで教育実践報告の機会を得た。模擬患者演習のねらいや、実践した内容を振り返り、その成果と今後の課題について検討する。

キーワード：小児看護学、模擬患者、看護過程、学内演習

### I はじめに

本学の小児看護分野では看護の前提である対象理解はもちろん、子ども一人一人に合わせた、その子どもに合った看護実践を行う力を身に着けることを目指している。そのためには、学生が子どもの成長・発達を理解し、子どもを全体的に捉えることが大切であると考えている。しかし、近年の学生は子どもと関わった経験に乏しく、子どもの具体的なイメージが持てていないため、子どもとどのように関わったら良いのかわからず、子どもの対応を苦手としている。その結果、学生の想像できる範囲を超えた子どもの行動に遭遇するとパニックになることもある。

また、子どもはコミュニケーション能力の発達途上にあり、その発達段階によって理解できる言葉、内容に大きな差がある。そのため、看護師は子どもの身体

状態をアセスメントすると同時にそのコミュニケーション能力もアセスメントする必要がある。さらに、子どもと関わる上で家族の存在は欠かせず、子どもの病気や入院を体験している家族がどのような状況にあるかをアセスメントした上で、家族ともコミュニケーションを行っていくことが求められる。したがって小児看護においては看護を思考する技術だけでなく、的確に情報を集めるコミュニケーション技術も非常に重要となる。

本学の小児看護学実習では1名の子どもを可能な限り5日間継続して受け持ち、看護を展開している。臨地実習を充実したものにするには、実習前の準備が欠かせず、その準備性を高める上で学内演習は重要である。西田<sup>1)</sup>は、小児看護学実習で学生は実習を開始する前の段階で未知なる子ども・未知なる病児へ関わることに少なからず戸惑いを感じていることを指摘し、

この段階において学生が子どもと関わるのが「できそう」と感じている状態で実習に入れると、少なくとも病児との対面へ脅威を感じずに実習に取りくむことができる」と述べている。このことから、学生にとって「未知なる」存在である子どもが、具体的なイメージのある「知っている」存在となることが、実習への準備として必要と考えた。しかし、学内演習で実際に子どもを対象に行うことは倫理的にも不可能であり、実際の子どもの反応などを想像しながらの学内演習には限界がある。

今回、実習を控えた3年生に実施している看護過程演習に教員が演じる模擬患者からの情報収集を取り入れたため、その実践内容を報告する。

## Ⅱ 本学の小児看護学教育

### 1. 小児看護学の授業構成

小児看護分野では、学生が子どもの成長・発達を理解し、子ども一人一人に合わせた、その子に合った看護実践を行う力を養うことを目的としている。これを受け、2年次の「小児看護学概論」「小児看護援助論Ⅰ」では子どもの発達やそれに応じた看護支援の在り方を学習し、3年次の「小児看護援助論Ⅱ」では2年次に学んだ知識を用いながら、臨床実践に繋がる思考方法や援助方法を学習していくように授業を設計している(図1)。

### 2. 小児看護援助論Ⅱにおける看護過程演習の位置づけ

『小児看護援助論Ⅱ』は、3学年後期に行われる分野別実習に向けて、それまでに学んだ知識と技術を実践

で活用することを意識し、『小児看護援助論Ⅰ』を発展させた演習を中心とした内容としている。看護過程演習は①教員とともに行う事例展開(全3回)と②グループワークで行う事例展開(全4回)で構成しており、学生は患者・家族のアセスメントと看護問題の検討、看護計画の立案までを行う。2事例の看護過程を通して、小児の特徴を理解したアセスメントとは何かを理解し、子どもと家族に対する看護援助に必要な視点と具体的方策を検討する思考過程を学ぶことを目指している。また、授業内で用いるアセスメントシートは分野別実習と同じ枠組みを使用し、後学期に控える分野別実習に向けての準備教育としても位置付けている。

### 3. 看護過程演習が抱えていた問題

看護問題を検討する上では、患者自身からの情報収集は欠かせない。しかし、子どもと関わった経験が少ない学生は、子どもに伝わる、子どもが理解できるような言葉がどのようなものが分からず、情報収集の難しさを経験する。実習を前にトレーニングを行おうとしても、学生同士や大人の模擬患者では子どもの発達段階に沿ったコミュニケーションを再現することは難しく、効果的ではないと考えられた。そこで、子どもの発達の知識をもち、実際の入院患児の姿を知る小児看護学分野の教員が子ども役となる模擬患者演習を看護過程演習に組み入れた。

## Ⅲ 今回の実践

### 1. 演習計画

#### 1) 看護過程演習の目的

| 学年 | 前期       | 後期       |
|----|----------|----------|
| 1年 |          |          |
| 2年 | 小児看護学概論  | 小児看護援助論Ⅰ |
| 3年 | 小児看護援助論Ⅱ | 臨地実習     |
| 4年 | 統合看護実習   |          |
|    | 研究セミナー   |          |

概論&援助論Ⅰ：子どもの発達やそれに応じた看護支援の在り方に関する専門的知識を学習  
 援助論Ⅱ：臨床実践に繋がる思考や援助方法を習得

図1. 本学の小児看護学関連科目の構成

小児看護学分野における看護過程は「小児看護学分野科目や専門基礎科目で学んだ知識・思考・技術を統合し、看護を必要とする子どもと家族に対する、発達を踏まえた看護過程を展開する方法を学ぶ」ことを学習目標としている。

今回の演習にあたり学習目標を見直し、「子どもの発達段階に合わせたコミュニケーションを理解することができる」「子ども、家族への情報収集を通して、療養生活を送る子ども・家族をイメージすることができる」を追加した。

## 2) 模擬患者活用のねらい

模擬患者を導入することによる効果として、学生が子どもの具体的なイメージ化ができるよう、以下のことを導入のねらいとした。

- ・具体的な子どもの反応を知る
- ・子どもとのコミュニケーション方法やそのポイントを知る

## 3) 事前準備

模擬患者役の教員には演習で用いる事例を共有するとともに役割についての打ち合わせを行った。事例登場人物の性格や、行動理由、学生に対する反応の仕方などについて詳細な設定は決めず、子ども役と母親役の教員に一任をした。この理由は細かく登場人物の状況を設定することで、模擬患者役の教員は設定通りに答えようとし、自然な反応を返せなくなると考えたからである。模擬患者を授業に導入した目的を考えると、学生と模擬患者ができる限り自然な形で会話をすることが理想であるため、模擬患者役の教員は学生からの質問に自由に答えるようにした。

模擬患者演習は看護過程演習②の第3回目での実施を予定した(図2)。看護過程演習②の第1回目の講義時に、第3回目に模擬患者演習を行うこと、模擬患者と家族に質問をする内容をグループ内で準備することを課題として提示した。さらに、質問内容の情報を必

要とする理由も合わせて考えるように説明した。これは学生が意図的な情報収集を行うことを意識づける目的がある。このほかにも、患児の発達を考慮した言葉を用いること、患児と家族の心理状況を配慮した言葉を選択することなど、実際のコミュニケーションを想定したものとした。

学生は第1回目、第2回目で患児と家族の状況についてアセスメントを行い、提示された情報で不足している情報、看護計画立案にあたって必要となる情報は何かをグループ内で検討した上で、模擬患者演習に臨んだ。

## IV 演習の実際

演習では学童期の急性リンパ性白血病の子どもの事例を用いた。10歳男児で寛解導入療法終了後、清潔隔離室にて骨髓機能回復を待っている状況にある児である。

学生たちは子どもの感染予防行動に対する認識を問う質問や、入院生活の中で見られる行動についての質問を行った(図3)。

学生たちは児が骨髓抑制中にもかかわらず感染予防行動が十分に行えていないことを問題として捉え、感染予防行動を行う理由を理解できているか尋ねた。子ども役の教員は、感染予防行動の必要性を子どもの発達段階に合わせた形で答えた後に、「しつこく言われるとやる気をなくす」と、学生が看護計画を立案する際に児の個別性を考慮した計画を立てられるような回答をしていた。また、他の学生は感染予防について母親も巻き込むように質問をし、家庭での様子や母親の考えを把握しようとしていた。子ども役の教員と母親役の教員は、まるで親子が学生の前で会話をするように言葉を交し合い、事例紹介では提示されていない児の考えを表現していた。

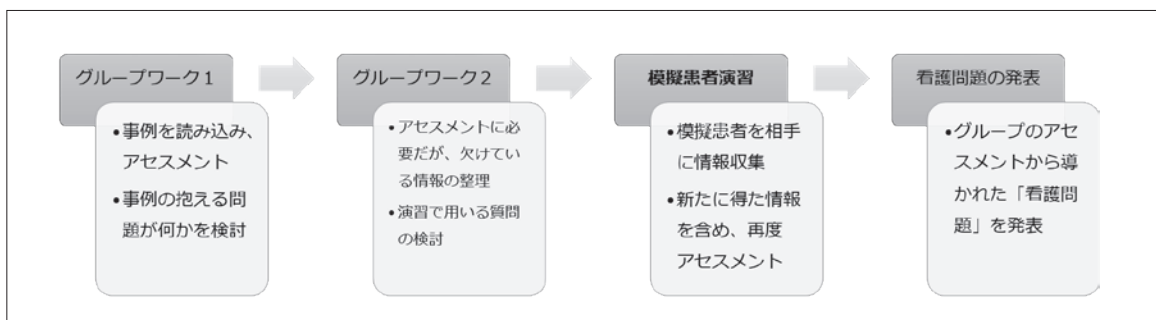


図2. 看護過程演習の演習内容

また、児の家族への思いや、入院生活で見せていた行動の理由を探ろうとすると、子ども役の教員は明確な回答を渋る反応を見せて、学生がそれ以上踏み込んだ質問をすることを拒んだ。学生たちは、子ども役の教員が質問への回答を拒否することを想定していなかったのか、非常に驚き、次の言葉をすぐに出すことはできなかった。

この他に、子ども役の教員が「○○って何？」と学生が用いた言葉が分からないと、学生に質問を返したり、母親役の教員が質問を受けて、きょうだいの様子や自身の疲労について語っていた。学生には事前に他のグループと質問が重複しないように伝えていたこともあり、学生の質問は疾患管理だけでなく生活や家族のことなど、様々な角度からの質問が行われた。

このような模擬患者との会話を行っていくうちに、学生たちは「質問したからといって、なんでも答えてもらえるわけではない」ということや、発達の知識が不十分なままでは「どんな説明ならば理解できるのか」が分からないといったことに気づきを得ていた。さらに、学生-患児-親の三者でコミュニケーションを行うことで、患児の家族に見せる姿を知ることができ、家族を巻き込むことで、質問した内容以上の情報を得ることができる、ということにも気づいていた。

演習を授業参観した他分野の教員からは、「意図的な情報収集をすることを強く認識できたのではないか」や、「子ども役の教員が演じた『実習生慣れている子ども』のイメージは入院している子どもを実際に知らないと演じられず、学生が実際の子どものイ

メージできたと感じた」、という評価を受けた。

## V 考察

幸山<sup>2)</sup>は、一般的にロールプレイは知識の定着を図るだけでなく、学習内容の活用や関心の向上に効果を上げるとされ、特に実習で初めて具体的な看護を学ぶ学生にとってイメージ化や動機付けなどに効果は大きい、と述べている。実際、ロールプレイや模擬患者を取り入れることで対象者のイメージ化が図れたという報告は看護技術演習を中心に多くなされており、その教育的効果は数多く検証されている。しかし、小児看護学分野では対象者が子どもとなるため、子どもに関わった経験が少ない学生が子ども役を演じた場合、緊張感に欠け、発達段階の設定も曖昧なものになりやすい状況がある。今回の演習は教員が子ども役と母親役を演じたことで、発達段階の設定が適切なものとなり、模擬患者を相手にコミュニケーションをするという、学生同士で行うロールプレイでは感じられない緊張感を感じることができたと考える。また、学生は「看護学生」という役割を演じていたが、「患者から情報収集をする」という目的が示されただけで、技術演習のような手順や行うべき行動などの手本となるものがなかった。このことが、学生に自分で考える必要性を意識させたのではないかと推察する。その結果、今回の演習で学生たちは、学生同士でのロールプレイでは得られなかった学びを得ることができたと考える。

また、学生は模擬患者を相手とするコミュニケー

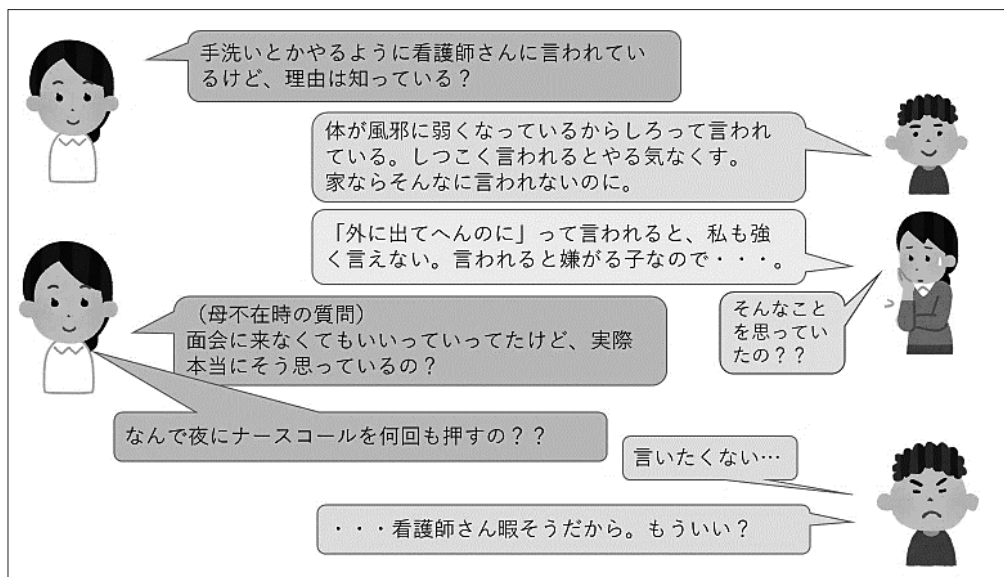


図3. 学生と模擬患者の会話（一部）

シオン演習の中で、コミュニケーションの難しさを再確認している<sup>3)</sup>という報告がある。本学の学生も、今回の模擬患者からの情報収集を通して、コミュニケーションの難しさを認識したと考える。実際、患児とのコミュニケーションの最中には、発達を思考する時間の余裕はない。発達に合わない言葉や内容話しても、それは一方的なものとなり、患児には伝わらない。今回、病児やその家族の特徴を把握している教員が模擬患者となることで、学生は相手の感情や反応、場の雰囲気を感じることができ、自分のコミュニケーションのあり方を振り返る機会となっていた。

今回の演習において、学生たちは子どもや家族からの情報収集の場面の設定から、小児看護学の知識だけでなく、これまで学んできた看護実践に関する知識やコミュニケーション技術を統合させながら、模擬患者演習に臨んでいたと考える。大原<sup>4)</sup>は授業は単なる知識の伝達ではなく、学習者がそれまでの知識を手掛かりにしながら、新しい概念や技術を再構成しようとする働きである、と述べている。学生が臨床実践において知識を活用した実践を行うためには、授業の中で知識と実践を結び付けて考える方法を身に付けておくことが必要である。そして、その能力を獲得するには学生が「経験」し、「経験」を通して考えることが大切と考える。今回の演習での「経験」は、学生に子どもや家族と関わる上で考えなければならないことを意識させたといえる。そしてこの経験が、臨地実習での「経験」を豊かなものにするための土台となると考える。

## VI 今後の課題

実習前の学内演習では、臨床場面と臨床実践をイメージし、これまでの学習内容と実践が統合できる演習となることが重要と考える。今回の看護過程演習は、学生にとって身近ではない発達段階の対象者をイメージすることに重点を置いた演習であった。学生の演習中の反応は子どもと会話をするものの難しさを一番に感じていたような印象を受け、子どもとのコミュニケーション方法やそのポイントを知るという模擬患者演習導入のねらいが達成されたか評価は行っていない。

今後は、模擬患者演習について学生からの評価を受け、演習内容をより洗練させていくことが課題として挙げられる。同時に、学生が模擬患者演習だけで子どもをイメージすることは困難であるため、演習以外の

授業内でも子どもの実際の姿をイメージできるような教授方法を検討し、導入していきたい。

## 引用文献

- 1) 西田みゆき, 北島靖子: 小児看護学実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処, 日本看護研究学会雑誌, 28(2), 59-65, 2005.
- 2) 幸山靖子: わかる授業をつくる教育技法3シミュレーション・体験学習(藤岡寛治, 野村明美編), 第1版, 12-20, 医学書院, 2000
- 3) 兒玉尚子, 納富史恵, 藤丸千尋: 小児看護学における模擬患者を活用したコミュニケーション技術演習の検討, 日本小児看護学会誌, 18(1), 79-84, 2009.
- 4) 大原美香: 実感的に納得した理解を促す教育技法 清潔の単元から Quality Nursing, 5(7), 26-31, 1999.